

目次

問題提起 いまなぜ、中世の金属を論じるのか——萩原三雄

3

第1部 資源とその周辺

中国地方の中世鉄生産——角田徳幸

11

中世における鉛の生産・流通・消費——平尾良光

35

中世における銅生産の推移——神崎勝

65

佐渡金銀山遺跡群——小田由美子

93

第2部 モノとしての金属

中世日本と東アジアの金銀銅——橋本雄

121

金属工芸品の存在意味を問う——久保智康

157

中世鑄造遺跡からみた鉄鍋生産——村木二郎 181

日本刀の素材と刀匠の技術——齋藤 努 203

鼎談 金属から見た中世——小野正敏 飯村 均 中島圭一 231

執筆者一覧

## 問題提起 いまなぜ、中世の金属を論じるのか

萩原三雄

### はじめに

今回のシンポジウムのテーマは、「金属の中世―資源・技術・鉱山」(二〇一三年七月六・七日、於…帝京大学文化財研究所)に設定された。金・銀・銅・鉄などの金属が中世の社会でどのような史的位置をしていたのか、それらの資源の獲得から製品に至るまでにどのような技術や労働力が駆使されていたのか等々、「金属」が内包する諸問題をさまざまな視点から論じようとしたものである。そもそも「金属」というものは、中世社会のなかできわめて重要な役割を演じていたはずにもかかわらず、他の分野と比較すれば、研究の遅れがめだっている分野の一つである。たとえば、資源と素材の研究のうちで、木や土、石や紙といった分野が永く、厚い研究が積み重ねられているなかで、もつとも出遅れ感が目立つ研究領域であろう。

しかし、そのなかでも先行してきた中世の鉄の研究を追うように、近年、金銀銅鉛に関する調査研究が進み、金属の歴史を究明するための研究素材がようやくそろってきた。そこで、本シンポジウムでは「金属の中世」をテーマとし、中世という時代に、金属がどのような役割を果たしていたのか、金属をとおしてどのような中世がみえるのか、このような強い問題意識のもとに、金属という「もの」やその「もの」を生み出している中世という時代や社会その

ものに、焦点をあてることにしたのである。「中世の金属」ではなく、「金属の中世」とした所以でもある。

以下、金属を論じようとする理由を、筆者の関心事で恐縮だが、いくつか列挙しよう。たとえば金の生産の場合、古代の産金活動は奥州、すなわち東北の砂金などがきわめて有名であるが、こんにちでは戦国期後半の山金開発の様相が把握され始めており、豊かな産金活動の実態が具体的になりつつある。しかし、古代と戦国期のはざまにある中世全般の様相は不明な点が多く、その時代はどのような状況にあったのかほとんどわからない。銅の場合もまたしかりである。古代の銅生産は山口の長登を中心に語られ、また時を経て近世における銅生産の動きも活発なことが論じられている。むろん、南蛮吹きなどの技術革新もよく知られている。その反面、中世という時代の銅のあり方はよくわからない。そのためか近年では、わが国への中国銭の大量輸入は素材として輸入していたのではないかという議論すら出されている。鉄もまた近年では東北地方で生産遺跡が数多く確認されてはいるものの、中世は比較的にくい状況に陥っている。

古代と近世に比べ、右のように意外に見えにくい「中世」における「金属」に焦点をあてて、金属がもつさまざまな属性にも視野を広げ、技術や消費のあり方などを含めて論じていくことを狙いとしたのが、本シンポジウムである。

## 1 金属は何を語るか、金属に何を探るか

資源としての金属とその獲得のありよう、金属にまつわるさまざまな技術、金属から得られた各種の製品が消費地にいたるまでの流通や、とうぜん消費のありかたなど、金属の語る内容はじつに多い。中世社会全般に及んで大きな影響を及ぼしているこの金属というものは、時々々の社会の動きや技術の水準を鋭く反映しており、いわば、それぞれの時代を映している鏡でもある。

それでは、人びとはなぜ、金属を求めるのか、あるいは求めてきたのか。その意味をいくつか問うとするならば、金属のもつ属性である「耐久性・持久性」、加工しやすい、形が造りやすいという「加工性・可変性」、再利用のしやすさから「リサイクルの容易さ」、さらには金属の発する「音」そして「色」に至るまで、人が金属に求めてきた理由は、とうぜん時代ごとに異なってはいるものの、多岐にわたっている。木や土などとくらべてみても、金属がもつ耐久性ははるかに高く、高度な技術も伴うこともあるが、加工は容易く、さまざまな形に変えることができるのも、金属のもつ特性である。リサイクルが可能であることも、金属の強みであろう。そうした特性を生かした金属のありようも、その時々を社会を如実に反映したものであり、金属をとおして社会や文化、あるいは技術のありさまを見ることができるのである。

金属は音を発する。その音は、人と神仏とを結び付ける役目をはたしている。峰岸純夫氏や笹本正治氏の研究によれば、「金属器の音が神仏を現場に迎える。神仏の臨場性に音が必須」であり、「音は、あの世とこの世を繋ぐ役割を果たしている」といわれている。金属が発する音は、さまざまな世界で、重要な役割を演じていることはあらためて強調するまでもないが、その金属の有する色についても、村上隆氏はとくに金と銅について、「多々ある金属元素の中でも、『有色』金属として、その独特の色を放つ特別な存在」とし、金属の色について、その意味を論じている。

右のようにみえていくと、金属が語る内容は多彩であり、かつ社会の深層にまで及んでいることがわかる。金属をとおして探るべきものもじつに多いことがわかるであろう。

## 2 本シンポジウムの論点

中世から近世にかけて、金属資源の開発は急速に進み、そのための技術は著しく向上した。一例を金銀山の開発に

引き付けてみると、それまでの長い間の砂金採取の時代から、山金などの鉱山開発に手がのび、さらに初期の露頭掘りから鉱山に孔を穿つ坑道掘りに大きく転換し、生産量は飛躍的に増大した。採鉱技術も高度化していった。採鉱された鉱石を粉砕する粉成(こなし)技術や、金銀銅を抽出する製錬技術も、鉱山白の改良普及によつて効率化し、灰吹法や焼金法、さらには南蛮絞り法などを導入することによつて純度の高い金属が得られるようになっていった。これら資源の獲得のためには大陸や朝鮮半島などの列島外との技術交流があり、列島内部でも広範囲に人が行き交い、そのぶん技術も活発に動いた。鉱山業に従事した人々は遍歴の民とも称され、山から山へと資源を求めて漂泊していった。金属資源の獲得のありようからみれば、中世という時代は、人と技術の動きの激しい時代であった。

資源から得られた素材を加工する技術も急速に向上した。そこにはさまざまな職人たちが存在し、加工の「場」をつくりだしていった。各地の中世遺跡からは、そうした場が、断片的ではあるが、登場し、なかには新潟県の北沢遺跡のように、資源を異にする複数の異業種が集団化した場もつくりだされていった。しかし、そうした場での職人たちの、生産体制のありようや組織のしくみなどは、こと中世に関していえば、たいへん見えにくい世界である。

リサイクルは、金属のもつ最大の属性であり、金属以外の素材と比較しても、最高の特性となつていく。さまざまな金属が、いくつも形を変え、機能を変じ、複数の世界で役割を果たしていった。たとえば、さきに述べた、中国銭が貨幣としての役割だけではなく、銅素材として別の役割を与えられていったという飯沼賢治氏の指摘など、まさに典型例であろう。さらに、戦国期の甲斐武田氏が、鉄砲玉製作のために銅銭を集めていたことなども興味深い事例のひとつであり、まさにリサイクルに適した金属ならではの特色である。

以上の金属の内包するさまざまな問題は、今回のシンポジウムの有用な論点として、議論の俎上にあがるであろう。ところで、古代では明確な形をあらわしているにも関わらず、中世ではたいへんわかりづらい状況に陥っているものがある。さきに述べた銅生産もひとつの例となろうが、古代における「金属」と、その後の中世という時代の「金

属」、さらに、近世的な「金属」の世界へと動くなかには、むろん技術の格段の向上や発展もあるし、社会からの需要に応じた金属の増量と大衆化への途もあり、技術の分業化への加速もあろう。それぞれの時代における「金属」の姿のなかに、そのときどきの社会と、時代の流れを見ることも可能である。シンポジウムの論点の一つとして、「金属」生産の系譜についての追求もあげておきたい。

### 3 「金属」に関する研究は今後どうあるべきか

それでは、近年活発化してきた「金属」に関する研究はいつたいつたのようにあるべきか、どのような方向に進むべきだろうか。すでに述べてきたように、また本書の各報告の中でもうかがえるように、金属をとりまくこれまでの研究にはさまざまな科学の世界が参入し、しかも果たしてきた役割もきわめて大きいことに気づかれるにちがいない。物質たる金属ゆえに、考古学的研究だけでなく、物質を対象とする化学分析の世界と重なることは当然のことである。

もちろん科学と考古学の世界だけの独占物ではない。金属はさまざまな記録にも登場するし、また絵画の中にも頻繁にあらわれる。文字や絵画の中に見える金属の姿もまた、金属の歴史を鋭く投影している。ゆえに、歴史のなかの「金属」を見極めるうえで以上のような諸科学の結集が必要となつてこよう。諸科学による学際的研究がさらに広くかつ深く展開されることがきわめて重要である。

「金属」の研究でもうひとつ気にかかるのは、中世という時代の「金属」のありようの究明である。さきに述べたように、古代や近世と比較し、中世という時代の金属はかなり見えにくい。金属それぞれを個別にみると、研究の蓄積はとうぜん異なっており、ひとつくくりで語るのは躊躇するが、相対的にみて、やや出遅れ感が目立っている。古代

から近世、近代への発展を重ねる金属の歴史のなかで、中世はかなり重要な時代である。それでは、見えにくい理由をはたして何なのか、調査研究の単なる出遅れなのか、より根本的に中世における「金属」の存在意義にあるのか、いずれにせよ中世という時代の金属の姿を追い求めることをつづけなければなるまい。

「金属の中世」というテーマをかかげた本シンポジウムでは、以上に述べた諸課題をも念頭に力のこもった報告が重ねられ、議論も活発に展開された。本書はそれらの報告集であるが、しかし「金属の中世」の今後の方向とありようをもぎわめて明瞭に示したものになっている。ご一読をお奨めするしだいである。

#### 参考文献

- 飯沼賢司「銭は銅材料となるのか」『経筒が語る中世の世界』文化財研究所企画シリーズ1、二〇〇八年  
小野正敏・萩原三雄編『鎌倉時代の考古学』高志書院、二〇〇三年  
笹本正治『中世の音・近世の音―鐘の音の結ぶ世界』名著出版、一九九〇年  
峰岸純夫「誓約の鐘―中世―探史研究の前提として―」『東京都立大学人文学部人文学報』一五四、一九八二年  
村上隆『金・銀・銅の日本史』岩波新書、二〇〇七年